

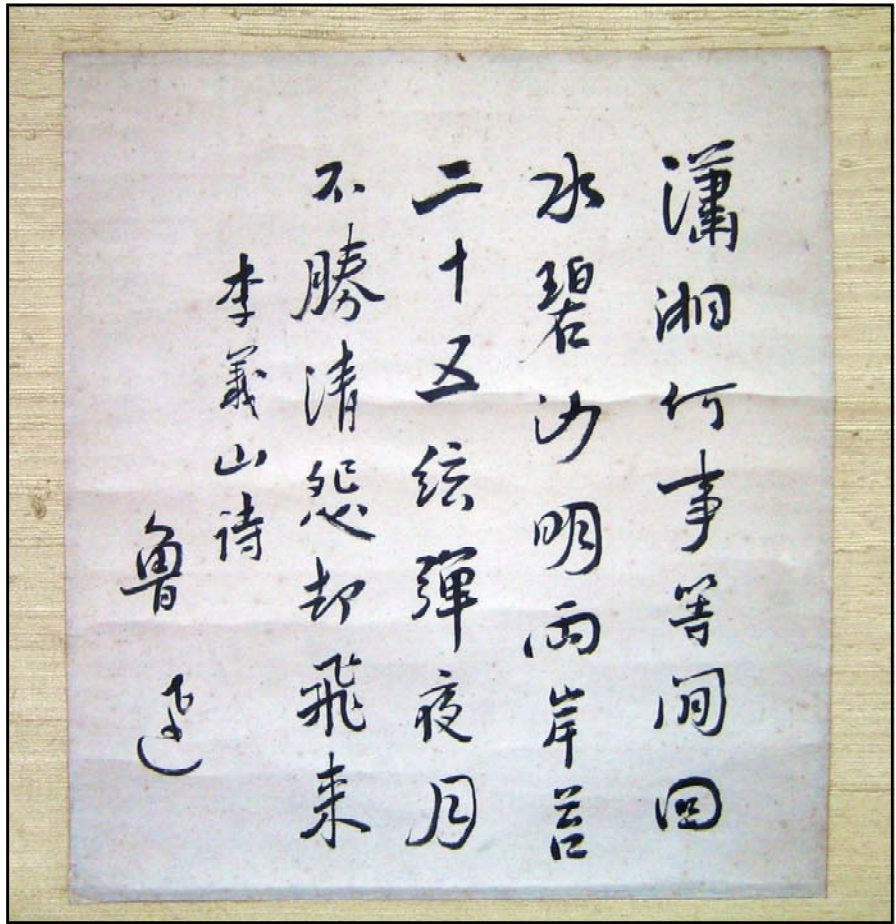
林芙美子蔵 魯迅親筆 錢起「歸雁」詩について

— これまでの定説と新見解 —

久保卓哉

林芙美子が魯迅から贈られた唐詩の書は、現在では新宿歴史博物館に蔵されている。その書が魯迅から贈られたのは、林芙美子がパリからの帰途上海に立ち寄り、魯迅と会った時の一九三二年のことであるというのがこれまでの定説である。だがそうであろうか。日本側の文献だけでは見えてこないものが、魯迅の記述の中にある。本稿はその根拠を示して年代を明らかにし、あわせて書かれた紙材が短冊か色紙かについても言及するものである。

「キーワード」 魯迅 林芙美子 内山完造 二十五絃詩 板垣直子 今川英子 上海



魯迅親筆墨跡 唐 錢起「歸雁」詩 新宿歴史博物館蔵

『新宿歴史博物館所蔵資料目録2 林芙美子資料目録 2004』（平成十六年三月発行）は、『D美術品／D38／掛軸「李義山詩」／魯迅／内容は錢起の詩であり、魯迅が勘違いしたものか。／270×240 額：1370×485』と記す。

## はじめに

平成二十一年九月二十三日から二十七日まで、厦門大学（中国福建省厦門市）で開催された「中日視野下的魯迅」国際学術研討会（1）に、口頭発表をするために参加したのには理由があった。魯迅をめぐる日本人に関する新資料を公表することと、中国の魯迅研究者からそれに対する見解と情報を得ることであった。

発表の冒頭で、魯迅が林芙美子に贈った親筆の墨跡は、林芙美子によって秘蔵され、現在は東京の新宿歴史博物館蔵となっていることを、写真を示しながら発言したのだが、演台にいても会場が静まりかえるのが分かった。

なぜなら、魯迅逝去の翌年である一九三七年、日本の改造社から出た『大魯迅全集』第五巻の口絵に「魯迅の筆跡（林芙美子所蔵）」として紹介されて以来、その筆跡の所在が那邊にあるのか定かではないと、中国では案じられていたからである。（2）

発表の内容はこれ以外に、林芙美子が所蔵していた周作人親筆の偈頌と、釋芝峰の詩軸、方紀生が林芙美子に宛てた書簡と（以上三点は新宿歴史博物館蔵）、方紀生が贈った金属製化粧箱と、魯迅から贈られたと伝わる純銀製腕輪を（以上二点は林福江氏蔵）を公表するものであった。（3）これらの文物の考察は稿を改めて行う。

その林芙美子が魯迅から親筆の唐詩の書を贈られたのは、パリからの帰途に上海で魯迅と会った一九三二年の事だというのが定

説となっている。だが、それは女性文芸評論家の先駆けとして知られ、林芙美子とも親交のあった板垣直子の説を孫引きした結果であって、魯迅の日記と林芙美子の文章を検証すれば、その二年前の一九三〇年、『放浪記』の印税によって満洲と青島、上海、南京、蘇州等を旅し、内山完造の紹介で初めて魯迅と会った時のことであることは明かである。

つまり、芙美子は一九三〇年と一九三二年の二度魯迅と会い、魯迅から親筆の書を贈られたのは最初に会った一九三〇年のことであるということになる。以下にこれまでの定説の跡をたどり、鄙見を述べることにする。

### 板垣直子以来の定説

林芙美子は一九三〇年（昭和五年）と一九三二年（昭和七年）の二度上海を訪れている。だがそれは、林芙美子の年譜が作成された最初からそのように記載されていたわけではない。

#### 満洲と巴里

林芙美子の年譜の最初のもは、昭和十六年二月二十八日改造社発行の『新日本文學全集』第十一巻林芙美子集である。（4）その年譜にはこう記されている。以下、一九三〇年の支那旅行と一九三二年のパリ行きを並列して示す。

・昭和五年一月、東京朝日新聞夕刊小説「春箋譜」を連載、これが小説としての處女作なり。同年秋支那滿洲に遊ぶ。(465頁)

・昭和六年、十一月、滿洲事變のさなか、シベリア經由にて約一年の豫定にて巴里へ旅立ち。(466頁)

その次に登場するのが、昭和二十二年四月十日萬里閣發行の『林芙美子選集』に載った板垣直子の「生と詩の作家―林芙美子の文學―」である。

・(「放浪記」の) 印税によって直ちに支那と滿洲に最初の旅行をしてゐる。(326頁)

・(昭和六年)の十一月に、彼女は思ひ切つて歐州への旅に上つた。(略) 正月にロンドンにわたり、三月に再びパリに戻り、七年の夏に歸朝した。(327頁)

これら改造社の年譜と板垣直子の評論にはまだ上海も魯迅も記されていない。

#### 上海と魯迅と短冊

上海と魯迅のことが記されるのは、昭和三十一年二月十五月初版角川書店發行の角川文庫、板垣直子著『婦人作家評傳』『林芙美子 傳記 六文壇に登龍』と「七渡歐」の文章である。(5)

・初め頃の「放浪記」の印税をもつて、芙美子は五年の秋に、一人憧れの大陸旅行にでかけた。ハルビン、長春、奉天、撫順、金州、三十里堡、青島、上海、南京、杭州、蘇州を二月にわたり歩いたのである。(六文壇に登龍 11頁)

・上海寄港の時はかねて知りあつていた魯迅に会い、**二枚の短冊**を贈られた。(七渡歐 77頁)

板垣直子は、一九三〇年に上海に行き、一九三二年には上海で魯迅と会い「二枚の短冊」を贈られたと記す。

なお、この角川文庫版には板垣直子の「初版の序」があり、そこには、「本書ができたのは、メデイカルフレンド社の依頼によるものである。(略) 昭和二十九年二月 代々木初台にて 著者しるす」とあるゆえ、上海と魯迅と短冊のことを書いたのは昭和二十九年であることが分かる。

板垣直子はまた、角川文庫版とほぼ同時の昭和三十一年三月一日に東京ライフ社から、東京選書、作家論シリーズ『林芙美子』を出しているが、上海と魯迅と短冊の表現は角川文庫版と同じで、その「序」に、「東京ライフ社は、現代作家達の評傳を刊行してゐるが、林芙美子をだすのにあたり、私の「婦人作家評傳」の中の「林芙美子」を求めたのである。(略) 私は今それに、さらに大きな増補を加へた。「婦人作家評傳」は、七人の昭和期の婦人作家を扱つて、昨年の六月、メヂカルフレンド社の依頼で、書下したものである。(略) 一九五五年八月 軽井沢にて 著者しるす」と書いている。つまり、東京ライフ社の作家論シリーズ

1 『林芙美子』は、角川文庫の『婦人作家評傳』に収めた「林芙美子」を一冊の本にしたものだと言者で断つているのである。

この九年後の昭和四十年に、林芙美子研究の集大成ともいえるべき書を板垣直子が出している。『林芙美子の生涯 うず潮の人生』大和書房一九六五年二月十五月初版発行がそれである。

・『放浪記』からあがった多額の印税で、今までは、他人のすることばかり思っていた海外旅行を、芙美子はすぐ実行にかかった。おなじ五年の秋、つまり最初の『放浪記』がでてから数ヶ月後に、かねての憧れだった大陸旅行にでかけたのも、いかにもこの人らしい。八月と九月の約二ヶ月をかけて、ハルビン、長春、奉天、撫順、金州、三十里堡、青島、上海、南京、杭州、蘇州を歩いた。(二七頁)

・上海寄港のときは、支那の有名な魯迅に会い、**二枚たんざく**をおくられた。(二七頁)

角川文庫版の「かねて知りあっていた魯迅」が、「支那の有名な魯迅」になり、「二枚の短冊」が、「二枚たんざく」になっただけで内容は変わらないが、表現としてはむしろ改悪の感がある。いずれにせよ、「二枚の短冊」とは何を根拠にそう記したのか。

板垣直子はこの書の巻頭の「はしがき」で、「もし世の人々が林芙美子の参考資料のなかに私の文献も求めるならば、私の旧著でなく、本書を用いてほしい」と訴え、「芙美子のかいたもの」なから、真実と真実でないものを識別するのは、馴れない者に

はできにくいことである」と芙美子研究者の誰もがぶつかる壁を指摘し、「林芙美子についての研究書は、まだ少ない」と自著がその先駆けとなる本格的な書であることを控え目にはあるが誇示している。とはいえ、板垣直子には実際に平林たい子や吉屋信子、壺井榮などの女流作家とともに林芙美子と交流があり、芙美子とは書簡のやりとりをしていたにもかかわらず、「二枚の短冊」だったのかどうか、芙美子に確かめもせずにそう記したのか、解せないところである。なぜなら、林芙美子が持っていたのは細長い短冊ではなく、四角い色紙だったからである。(写真参照)

ここで中間的に整理しておこう。林芙美子が一九三〇年に上海に行き、一九三二年に魯迅と会って「短冊」を贈られたことは、板垣直子によって初めて言及されたということ。だが、この「短冊」は、三年後に「色紙」に改められる。

#### 魯迅と色紙

色紙としたのは和田芳恵で、『日本文学アルバム24 林芙美子』(筑摩書房一九六八年六月三十日発行)に魯迅の墨跡の写真を載せて次のように記す。

五月、「改造」の山本社長から旅費を送ってもらい、帰りは船をえらんだ。途中寄港した場所では、ナポリがいちばん気に入った。上海では、知り合いの魯迅に会い、**色紙**を贈られた。(三二頁)

色紙とするのは和田芳恵のこの記述から始まる。

だが、一九三〇年と一九三二年に上海を訪れ、魯迅と会ったのは一九三二年のパリからの帰途であるとするのは、板垣直子の説をそのまま受け継いでいる。それはこの『日本文学アルバム24 林芙美子』と同じ年に出た『カラー版日本文学全集26 林芙美子・円地文子』（河出書房一九六八年九月三十日初版発行）の巻末に付された和田芳恵作成の「林芙美子・年譜」でも同じで、次いで出た平林たい子著『林芙美子』（新潮社一九六九年七月二十五日発行）でも、平林たい子は、

・昭和六年の二十八歳になると、小説は出版されるやら、各地を旅行するやら、多忙はいや増した。先年の秋満洲、上海を旅したのが病みつきで旅行好きになっていった。（二二頁）

・ところで、昭和六年、彼女は宿願たるパリ行きをとうとう決心した。（121頁）

尚この旅行の終りに、「巴里日記」にはないが彼女は上海で魯迅と会見した。パリでは、あまり作家とは逢わなかったらしい。これは一つの大きいみやげである。（139頁）

と記している。平林たい子は色紙のことを書いていないが、一九三〇年に上海を訪れ、一九三二年に魯迅と会ったという芙美子の足跡は同じである。

この認識は平林たい子の記述によって更に不動のものになった

感がある。芙美子の夫林緑敏の校閲を得たと銘打つ『現代日本文学23 林芙美子 平林たい子集』（学習研究社一九七一年三月一日初版発行）の「林芙美子年譜」でも同じで、(6) 続く『現代日本文学アルバム第13巻 林芙美子』（学習研究社一九七四年六月一日初版発行）では色紙の写真に「帰国途次、上海で魯迅に会い、書いてもらった色紙（昭和7年6月）」（151頁）の説明をつけ、加うるに魯迅の写真載せて「魯迅（昭和七年六月、パリからの帰途、上海で会う）」（199頁）と記し、巻末の川副国基作成の「年譜」でも同じように芙美子の足跡を記述している。

#### 李義山詩の色紙

林芙美子研究を精緻なものにしたのは、文泉堂出版から出た『林芙美子全集』全十六巻であろう。今川英子が作成した「年譜」には、魯迅からもらった色紙は「李義山」詩であると書かれていることからそれは分かる。今川英子は一つひとつの資料にあたってこの「年譜」を書いている。

・昭和五年（一九三〇）二十七歳 八月、改造社の「新鋭文学叢書」の一冊として刊行された『放浪記』がベストセラーとなり、その印税で上州湯ノ沢へ行き、同月中旬より念願の中国大陸、満洲、上海旅行に単独で出発。ハルビン、長春、奉天、撫順、金州、三十里、大連、青島、南京、杭州、蘇州を巡り、九月二十五日帰国。（292頁）

・昭和七年（一九三二）二十九歳 五月、改造社山本実彦社

長から旅費を借り、日本郵船榛名丸で帰国。途中、上海に立ち寄り、**魯迅**に会い、「**李義山**」の詩の色紙を貰う。六月十六日、欧州旅行から帰国。(294頁)

色紙の内容が李義山の詩であることは、今川英子によって初めて指摘された。『林芙美子全集』第十六巻 文泉堂出版一九七七年四月二十日発行)

続いて魯迅と色紙が紹介されるのは『新潮日本文学アルバム 林芙美子』(新潮社一九八五年八月二十五日発行)で、磯貝英夫は、

七年五月改造社社長山本実彦に電報で旅費を頼み、マルセイユから、榛名丸で帰国の途について。その途次では、ナポリに殊のほか感銘を受け、また上海では**魯迅**に面会して、**色紙**をもらっている。(47頁)

と記し、色紙の写真に「魯迅にもらった色紙(昭和7年6月)」と説明をつけ、これまで通りの記述を踏襲している。

#### 内山完造の紹介 銭起「歸雁」詩の色紙

今川英子の林芙美子研究はまた新しい成果を提示する。『藝術……夢紀行』……シリーズ③ 林芙美子 放浪記アルバム』(芳賀書店一九九六年十一月十五日第一刷発行)がそれで、内山完造と銭起「歸雁」詩という名が登場する。芙美子は最初に上海を訪れ

た一九三〇年にも魯迅と会い、それは内山完造の紹介であったこと、その日は九月十九日であったことを初めて提示し、色紙の内容は李義山の詩ではなく銭起の歸雁詩であると修正し、一九三二年のその日は六月十二日であったと付け加えた。今川英子は魯迅の日記を参照し、唐詩を調べたのである。このアルバムに色紙の写真と魯迅の写真がないのが惜しまれるが、巻末に付された「林芙美子年譜」はこう記す。

・昭和五年(一九三〇)二十七歳 七月、改造社の「新鋭文学叢書」の一冊として刊行された『放浪記』がベストセラとなり、その印税で八月中旬より、満洲、中国を旅する。途中**上海**では、**九月十九日**、日中友好運動家として知られる書店主、**内山完造**の紹介で**魯迅**と会う。九月二十五日帰国。(148頁)

・昭和七年(一九三二)二十九歳 五月、改造社山本実彦社長に旅費を送ってもらい、日本郵船榛名丸で帰国の途につく。途中、上海に立ち寄り、**六月十二日**、**魯迅**に会い、**銭起の詩「歸雁」の色紙**をもらう。六月十五日帰国。(149頁)

この年譜によって、芙美子は一九三〇年九月十九日と一九三二年六月十二日の二度魯迅と会い、一九三〇年は内山完造の紹介によるもので、一九三二年に魯迅からもらった色紙は李義山の詩ではなく銭起の歸雁詩であったことが分かるようになった。

だが、魯迅の色紙をいつもらったかということに関しては、板

垣直子から始まる一九三二年説を踏襲している。

林芙美子はバリ滞在中から帰国後まで日記を残している（新宿歴史博物館蔵）。これに詳細な注釈と解説をほどこして評価が高いのが今川英子の『林芙美子 巴里の恋 巴里の小遣ひ帳 一九三二年の日記 夫への手紙』（中央公論新社二〇〇一年八月七月初版発行）である。だが、芙美子が上海に寄港した前後の日記は、「四月二十五日～六月三十日 欠落」で、肝心の部分は残っていない。今川英子はそこに注をしてこういう。

芙美子は一九三二年五月十二日夜リヨン駅を発ち、マルセイユから榛名丸で帰国の途につく。途中、上海で魯迅に会い、六月十五日に帰国する。四月二十五日から帰国後の六月三十日までのことは、公刊された『滞歐記』や『日記Ⅰ』（『巴里の日記』を含む）には記述があるが、〈日記〉ではなぜかこの間のページがそっくり破り取られている。芙美子自身の意思によるものか否かは不明。（130頁）

したがって、芙美子の実際の日記を用いてバリの帰りに魯迅から色紙をもらったかどうかを確かめるすべはない。破り取られた日記には、上海の事、魯迅の事が書かれていたであろうことは、最後の四月二十四日までの平生の記録を見れば容易に想像がつく。魯迅研究の側からみても失われた日記の価値は計り知れないほど大きい。ため息をつくばかりである。（7）

## 林芙美子作品中の上海と魯迅

自らの日記を破り取った芙美子だが、上海と魯迅のことは作品の中で書いている。それを発表年の古い順から抜き出してみよう。

### 「日記」

最初の作品は魯迅が存命中の一九三五年八月に『文學界』（文圃堂書店一九三五年七月五日印刷八月一日発行）に発表した「日記」である。

魯迅氏の「魯迅選集」を貰ふ。魯迅氏に逢つたのは一九二九年の秋と、一九三二年の歐洲よりの歸へり、つましい生活をしてゐられた。故郷とかの家鴨の喜劇、阿Q正傳は心愉しい作品だ。このひとは詩を澤山讀み、詩を歌ふ。支那と云ふ國はうらやましい程家系が立派だ。魯迅氏へ長い手紙を書いた。六月十七日（105頁）

この作品は『文學界』に「創作」として掲載された十篇のうちの一つで、岡本かの子、小林秀雄、中原中也、阿部知二などと並んで芙美子が執筆している。

この「日記」の中で芙美子は一九二九年の秋と一九三二年に魯迅と逢つたと綴り、魯迅へ長い手紙を書いたと綴る。事実は一九二九年の秋ではなく一九三〇年の秋で、魯迅への長い手紙は存在しない。つまり、これは創作した文学作品であって、必ずしも事



実が書かれているわけではない。板垣直子が、芙美子の書いたものの中から、真実と真実でないものを識別するのは、馴れない者にはできにくいことだ、といったのはこういうところにある。

### 「魯迅追憶」

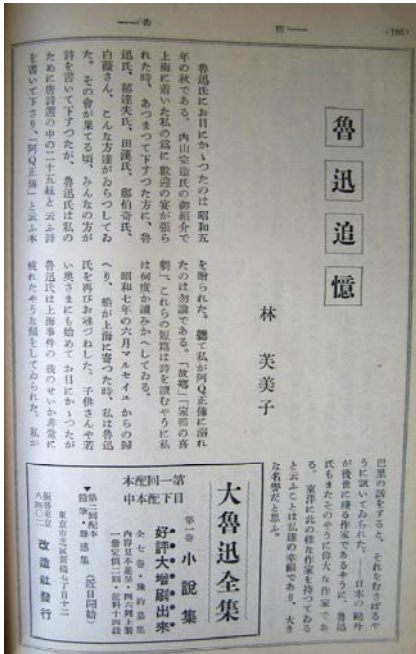
しかし、魯迅が死んだ翌年の一九三七年、『改造』四月号に発表した「魯迅追憶」は、事実を書いたものと考えられる。全文を挙げる。

魯迅氏にお目にかゝつたのは**昭和五年**の秋である。**内山完造**氏のご紹介で上海に着いた私の爲に歓迎の宴が張られた時、あつまつて下さつた方に、**魯迅氏**、**郁達夫氏**、**田漢氏**、**鄭伯奇氏**、**白薇さん**、こんな方達がゐらつしてゐた。その會が果てる頃、みんなの方が詩を書いて下さつたが、魯迅氏は私のために**唐詩選の中の二十五絃と云ふ詩**を書いて下さり、「阿Q正傳」と云ふ本を贈られた。聽て私が阿Q正傳に溺れたのは勿論である。「故郷」「家鴨の喜劇」、これらの短篇は詩を読むやうに私は何度か読みかへしてゐる。

**昭和七年**の六月マルセイユからの帰へり、船が上海に寄つた時、私は**魯迅氏**を再びお尋ねした。子供さんや若い奥さまにも初めてお目にかゝつたが魯迅氏は上海事件の後のせいか非常に疲れたやうな顔をしてゐられた。私が巴里の話をする、それをむさぼるやうに訊いてゐられた。――日本の鷗外が後世に残る作家であるやうに、魯迅氏もまた

そのやうに偉大な作家である。東洋に此の様な作家を持つてゐると云ふことは私達の幸福であり、大きな名譽だと思ふ。(186頁)

この「魯迅追憶」はわずか四百四十五字の小品で、このページ天にある柱には「廣告」とあり、下の余白にはこの年の一九三七年に改造社から出版されたばかりの『大魯迅全集』の第一回配本が目下配本中との広告がある。このページの前には島木健作の『大魯迅全集』を讀む』があり、柱には同じく「廣告」とある。新刊『大魯迅全集』を宣伝するために企画された欄に、改造社から寄稿を求められてこの小品を書いたということであろう。したがって、『文學界』の「日記」のように創作として書かれたものではない。事実を追つて書かれ、魯迅への深い敬意が表れている。



林芙美子の「魯迅追憶」(『改造』1937年四月号)

「魯迅追憶」が事実を書いたものと考えられるもう一つの大きな根拠は、魯迅の日記にある。

#### 魯迅の日記

魯迅は一九一二年五月五日から日記をつけ始め、死の前日の一九三六年十月十八日までほぼ毎日途切れることなく日記を書いている。その魯迅の日記には、林芙美子が二度登場する。一度は一九三〇年九月十九日で、もう一度は一九三二年六月十二日である。

#### 【一九三〇年九月】

十九日 晴。午前、季市来る。蔡君来る。ソ連の左翼作家に手紙。写真をローヴェル、スメドレー、内山に贈る。紫佩より手紙。晩、内山、隣家を借りて宴席を設け、林芙美子を招く、余も誘われる、同席者約十人。(8)

#### 【一九三二年六月】

十二日 日曜。雨。昼まえ、林芙美子来る。昼過ぎ山本夫人より手紙。六日付。蘊如来る、朱家より送られた干菓子、焼餅、乾燥野菜、筍豆二籠を持参す。晩、晴れる。

一九三〇年は林芙美子が『放浪記』の印税で初めて満洲、中国を旅して上海に行った年である。魯迅の日記と林芙美子の「魯迅の追憶」はびつたりと一致する。簡潔な魯迅の記録を、補って余りあるものが芙美子の文章にある。内山完造が設けた宴席には、魯迅の他に、郁達夫、田漢、鄭伯奇、白薇がいて、みんなが詩を書

き、魯迅は二十五絃の詩を書いて『阿Q正傳』を贈ったという。この時魯迅が書いた「唐詩選の中の二十五絃と云ふ詩」とは、銭起の「歸雁」のことで、魯迅は銭起詩と書くべきところをどういうわけか李義山詩と書いたのである。(9)

この書を秘蔵してきた芙美子は、みずから昭和五年の秋に魯迅から贈られたと記す。そして魯迅の日記は、それが一九三〇年九月十九日であることを記す。板垣直子以来今川英子まで、それが一九三二年のことであるとしてきた定説は、ここに根拠を失ったように思う。

#### 「周作人氏へ」

林芙美子にはもう一篇、二十五絃の詩について書いている文章がある。一九四一年、改造社の『文藝』五月号に発表した「周作人氏へ」がそれである。(全四頁のうち関係する箇所を引く)

魯迅先生も亡くなられて、何年になりますでせうか。昭和七年の夏、上海の先生のアパートでお目にかゝつたのが最後でした。今日も魯迅先生の書いて下さいました軸をながめながら透徹した美しい文字にうたれてをります。

郁達夫君も現在何處に住んでおられるのかかいかも判りません。杭州のお姉さんが亡くなられたと云ふことを風の方よりにきゝました。

魯迅先生は、唐詩選のなかの二十五絃の詩を私に書いて下さいましたけれど、先生は、この詩を、非常にお好きの

やうですな。

瀟湘何事等問回

水碧沙明兩岸苔

二十五絃彈夜月

不勝清怨却飛來

方さんがこの間も話してゐましたけれど、魯迅先生位かまはない飾らない人はないさうで、行つてみると、お机の下に菜つぱの白菜がうんと押しこんであつたさうです。椅子も二つ位しかないので、澤山のお客様がみえると、立つて話をするのださうです。

もう、今では魯迅先生も亡くなられていらつしやらないし、いまさらながら歳月の歩みを怖ろしいものゝやうに思ひます。(90頁)(10)

これは前年の一九四〇年十二月十九日に、華北政務委員会の教育總署特辨に就任した周作人が、挨拶を兼ねて、京都と東京で開かれる東亜文化協議會に出席するために来日するのを歓迎する文章で、『文藝』には「周作人より筆者に贈つた色紙」と説明した写真が載っている。(11)

芙美子は手紙形式のこの文の最後を「日本もいまから美しい景色に染つてゆきます。方さんや、周先生を日本の田舎に御案内したいものだと思ひます。山河の美しくこまやかな景色をお見せしたいものと愉しみにしております。先生を中心にして、五六人

田舎へ旅行をしたらどんなに愉しい事です。どうぞ、近いうちに、一大決心をして日本へお出掛け下さいますやうお待ちしてをります」と結び、温かくて女らしい優しさをにじませている。

ここには周作人への親しみをこめた敬意と、魯迅を親しみ愛するがゆえの哀惜の思いがある。それだけに、魯迅との記憶は正確に真実が綴られている。

なお、芙美子が「魯迅先生の書いて下さいました軸をながめながら」と書いていることからすると、魯迅から贈られた色紙はこの時すでに軸として表装されていたと考えられる。

#### 林芙美子の『日記』

芙美子は作品としての日記を多く残している。前掲の『文學界』の「日記」の二年後にも、『新潮』に「日記」を発表し(一九三七年四月号)、東峰書房からは『日記』第一卷(一九四一年十月十二日発行)と、『日記』第二卷(一九四二年六月十七日発行)を出版している。日記と名のつく作品はさらに多く、「八月の日記」「山日記」「女ふところ日記」「散文家の日記」「姉の日記」「女の日記」「不断の日記」「或時代の日記」「こほろぎの日記」「女の日記」「田園日記」「巴里の日記」などがある。(4)

このうち、上海、魯迅、内山書店に言及したものに東峰書房刊『日記』第一卷(一九四一年十月十二日発行)がある。シベリア鉄道に乗ってパリに行った欧州旅行記としての一冊で、帰途上海に寄った時のことを次のように書いている。

六月二十一日

波荒く、朝はベッドに伏したまゝ朝食、波が荒かつたせ  
るか、雪崩や、蛇の夢や、見たこともないやうな子供の夢、  
赤い雲なんかの夢を見るなり。夜、チェホフの書簡集を讀  
む。

六月二十二日

朝、八時に上海入港。

上海は昔見物に來た處なので懐かしい處だった。同室の  
女史達と四川路の内山書店へ行く。こゝの御主人夫婦は實  
によき人達であり、私の尊敬してゐる人達なのだ。

上海事變のため、昔の上海とは變つてゐた。オデオン座  
も廢墟のやうになつてしまつてゐる。

内山氏の御招待で、代議士のN氏達と、覺林と云ふ支那  
の精進料理を御馳走になる。N氏は勞動代表とかでジュネ  
ーヴへ行かれた方なり。一行は私達の船の一等室に乗つて  
ゐられる。(略)

上海では日本の圓が安くなつてゐて、一圓に對して支那  
のお金が一ダラ半位になつてゐた。昔、見物に來た時は、  
一圓が三圓にも使へたものである。

支那料理を食べて、私と内山氏と二人で魯迅氏のアパー  
トを訪問した。四川路の、陸戦隊の建物のそばの小さなア  
パートに、奥さんや子供さん達と簡素な生活をしてをられ  
た。魯迅氏より『阿Q正傳』を戴き非常に嬉しかった。

夕方小雨の中を出航。

いよいよ明日は日本が見える。あんなに歸りたがつてあ  
た日本の山河が見える。私は子供のやうに興奮して眠れな  
い。

六月二十三日

非常に波が高い

みんな興奮してゐるけれど、波が高いので、荷造りが出  
來なくつて弱つてゐる。ベッドに寝轉び『阿Q正傳』を讀  
み、改造の魯迅氏の「故郷」を讀む。透明ないゝ作品だと  
おもふ。魯迅に逢ふのは二度目だけれど、今度逢つた魯迅  
氏は何だか蒼ざめた顔をしてをられた。御病氣ではないか  
と思ふ。(略)

チェホフの書簡集を讀んでみると、何時もお金の心配が  
出て來る。魯迅氏の作品にも、お金のことを心配して書い  
た作品があつた。私も船からあがれば、一切合切を吐き出  
して無一文になつてしまふのだ。(230-233頁)

魯迅氏のアパートを訪問したというのは、『文藝』の「周作人氏  
へ」と同じだが、そこに内山完造と二人で行つたことがつけ加わ  
る。そしてアパートの位置は、四川路の陸戦隊の建物のそばにあ  
り、そこでは奥さんと子供さんたちと一緒に住んでいたことがつ  
け加わる。

芙美子のこの記述はまったく正しい。アパートとは「拉摩斯公  
寓」(ラモスアパート)のことで、一九三二年六月に芙美子が訪

ねた時、魯迅はここに許広平、周海嬰とともに住んでいた。その位置は日本の陸戦隊本部のすぐ斜め向かいにあったことも事実である。

林芙美子は自分の作品について「發表したものに對して執着を持たない」、「どの作品を何年の何月何日に書いたといふはつきりした記憶がない」、「只そのころの私のなかの出来るだけのフイクシオンを使って、唯一の可能な年代にたよつたまでだ」という。

(12) このつづきやきは本当だろうと思う。その典型は「魯迅氏に逢つたのは一九二九年の秋」「魯迅氏へ長い手紙を書いた」と綴つた前掲の「日記」(『文學界』文圃堂書店一九三五年八月一日発行)である。ここには「フイクシオン」がある。だがその後には書いた「魯迅追憶」と「周作人氏へ」と『日記』第一巻の記述にはそれが無い。魯迅との出会いは、フイクシオンを許さない強くて厳しい出会いがあつたのだと思う。(13)

### あとがき

文献の上で、魯迅親筆の墨跡が色紙に書かれたものだと最初に言及したのは和田芳恵だが、板垣直子のように短冊という人もいて、果たして実際はどうなのか確かめてみる必要があつた。所蔵する新宿歴史博物館に閲覧申請をして許可を得、魯迅の書が目の前に現れた時は思わず声が出た。

墨跡は軸装されているため、見ただけでは厚紙の色紙なのか、宣紙なのか分からない。筆・紙・硯・墨の文房四宝のいずれにも

暗愚である私に鑑定する力はないため、了解を得て紙質が分かるように接写写真を撮つた。それをさらに拡大して子細に見ると、紙の周縁には金色の縁取りがある。今も普通にみられる色紙の縁と同じである。和田芳恵のいう通りであつた。

魯迅が厚紙の色紙に書き、芙美子の依頼を受けた表装師がそれをがして掛軸にした、ということであろう。

魯迅の墨跡は今も黒々として、かすれも汚れもなく、八十年を経てもなお潤いを含んで瑞々しい。いかに芙美子によって大事に守られてきたかが分かる。芙美子の魯迅を景仰する深さがここに表れているように思う。

本稿に引用した魯迅の書と林芙美子のはがきについては、林福江氏と新宿歴史博物館の許可と協力を得た。ここに心から感謝の意を表したい。

(本稿は、平成二十一年度学術振興会科学研究費補助金、基盤研究(C)による研究成果の一部である)

### 注

(1) 「中日視野下的魯迅」国際学術研討会(第二回厦門大学魯迅国際学術研討会)は、厦門大学(中国)、東北大学(日本)と北京魯迅博物館の共催によって、厦門大学人文学院を会場に開かれた。(二〇〇九年九月二十三日〜二十七日)筆者は「林芙美子所蔵魯迅、釋芝峰及びその他の文物について」と題して、口頭発表を行った。

(2) 周国偉著『魯迅与日本友人』(上海書店出版社、二〇〇六

年)「魯迅与林芙美子」の章、第一四六頁参照。そこには、「此詩印入 1937 年日本改造社出版的『大魯迅全集』第 6 卷、并説明、魯迅の筆跡(林芙美子所蔵)。」とあるが、第 6 巻ではなく第 5 巻(一九三七年八月二十一日発行)が正しい。

(3) 釋芝峰が林芙美子に贈った七言絶句についての考察は、久保「林芙美子蔵釋芝峰七言絶句について」(『福山大学人間文化学部紀要』第九卷、二〇〇八年三月)で述べた。

(4) 『林芙美子全集』第十六卷(文泉堂出版、昭和五十二年四月二十日発行)に付された今川英子作成「年譜」と「著書目録」を参照した。

(5) これより前、昭和二十八年八月二十五日角川書店刊『林芙美子集』(昭和文學全集 19)と、昭和二十九年二月十五日筑摩書房刊『岡本かの子・林芙美子・宇野千代集』(現代日本文學全集 45)と、昭和二十九年十二月二十日創元社刊『林芙美子・宮本百合子・野上弥生子集』(現代随想全集 第二十四卷)の三書に、板垣直子による年譜があるが未見。

(6) 「林芙美子年譜」の末尾に、「(本年譜は編集部が作成し、林緑敏氏の校閲を得ました)」と記す。

(7) なお、二〇〇三年に出た川本三郎著『林芙美子の昭和』(新書館二月五日第一刷発行)には上海が登場せず、巻末の「林芙美子 略年譜」昭和七年(一九三二)の条に「五月、改造社社長山本実彦に旅費を頼んで、郵船榛名丸で帰国の途につき、途中、上海で魯迅に会って、六月十六日帰

国。」(403頁)とあるのみ。

(8) 日本語訳は『魯迅全集』(学習研究社刊)による。

(9) 魯迅は四人の日本人に銭起の「歸雁」詩を揮毫している。そのうち三人には「李義山詩」と題し、四人目の中村亨(児島亨)への揮毫の時は詩人名を書いていない。

一、本間久雄、義山詩、魯迅、一九二八年春。

二、林芙美子、李義山詩、魯迅、一九三〇年九月十九日。

三、長尾景和、義山詩、周豫才、一九三一年二月十五日。

四、中村亨(児島亨)、無題、魯迅、一九三四年

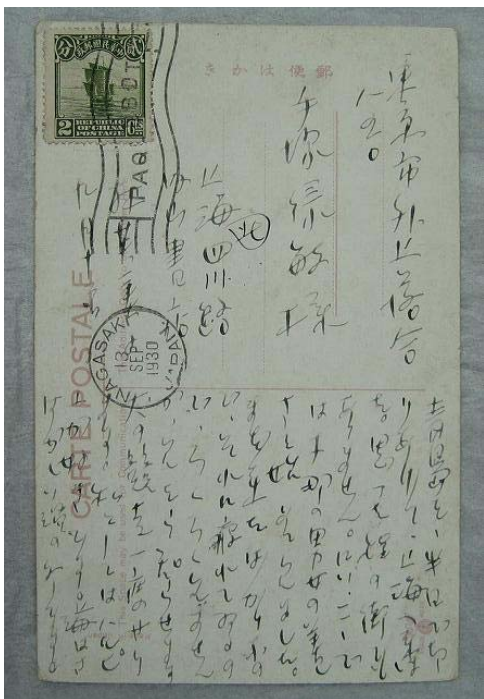
(10) 『文藝』五月号に掲載された「二十五絃詩」(銭起「歸雁」詩)には二カ所の誤植がある。一句目の第六字を『文藝』は「問」とするが、「問」が正しく、二句目の第五字を「雨」とするが、「兩」が正しい。

(11) 周作人が林芙美子に贈った色紙の為書には「廿九年七月、偈頌を寫し、林女史の雅令に應ず。作人」と書かれている。内容は『妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五』の經文に見える偈頌である。現在は新宿歴史博物館蔵。

(12) 『林芙美子文庫 風琴と魚の町』新潮社一九四九年八月二十五日発行の「あとがき」と、『林芙美子文庫 魚介』新潮社一九五〇年四月二十五日発行の「あとがき」に記している。また、『林芙美子文庫 泣蟲小僧』新潮社一九五〇年六月二十日発行の「あとがき」にも同様の記述がある。

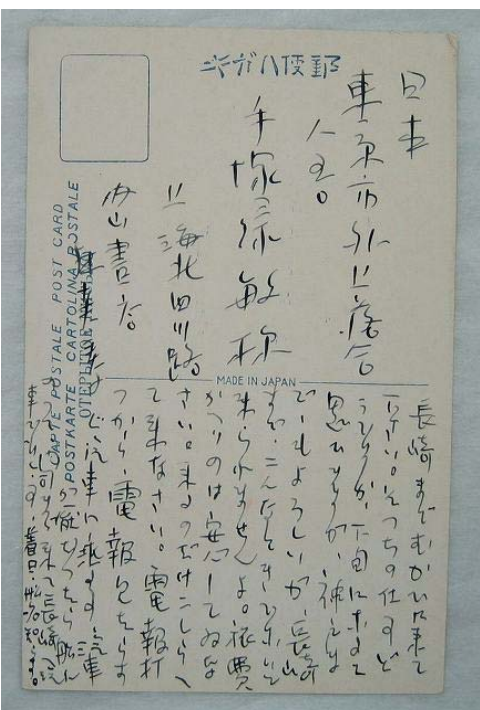
(13) 林芙美子は一九三〇年九月、上海で魯迅と会う前の九月十二日に夫の緑敏に内山書店からはがきを出し、パリからの

帰りの一九三二年にも内山書店を通して夫の緑敏にはがきを出している。魯迅と会う時も、はがきを出す時も内山完造の世話になっていることが分かる。



林芙美子の緑敏宛はがき。一九三〇年九月十二日に書き、北  
 四川路の内山書店から出している。(新宿歴史博物館蔵)

青島を、半日で切りあげて、上海へ来ました。思った程の街ではありま  
 せん。只、ここでは支那の男女の美しさを始めて見ました。まだ来たば  
 かりなので、それに疲れてゐるのでろくろく見ませんが、見たら知らせ  
 ます。犬の競走一應せります。私としてはハルビンが 好きです。上海は  
 さはがしい渦の町です



林芙美子の緑敏宛はがき。一九三二年パリからの帰り、上海北  
 四川路の内山書店から出したもの。(新宿歴史博物館蔵)

長崎までむかひに来て下さい。そつちの仕事どうですか、下旬になると  
 思いますが、神戸まででもよろしいが、長崎まで、こんなときでないとか  
 られませんよ。旅費かへりのは安心してゐなさい。来るのだけこしらへて  
 来なさい。電報打つから、電報見たらすぐ汽車に乗る事 汽車が厭だつ  
 たら船にのつて門司まで来て長崎へ汽車で行く事、着日船名知らず。

On a Calligraphy of *Lu Xun* in the possession of  
*Fumiko Hayashi* :

Accepted Notions and the New Point of View

KUBO Takuya

Lu Xun and Fumiko Hayashi met twice in Shang Hai in a introduction of Kanzo Uchiyama. At that time Lu Xun gave her a calligraphy of “Gui Yan Shi” by Qian Qi. Mr. Zhou Guo Wei worried about whereabouts of Lu Xun’ s calligraphy and called attention to the researcher in Japan (《Lu Xun yu Riben Pengyou》 published in 2006 by Shang Hai Shu Dian Chu ban she).

I want to report first that it was treasured by Fumiko and it is in the possession of Shinjuku Historical Museum now.

*Keywords: Lu Xun, Fumiko Hayashi, Kanzo Uchiyama, Naoko Itagaki, Eiko Imagawa, Shanghai*